

モモ灰星病、ナシ黒星病の防除を徹底してください

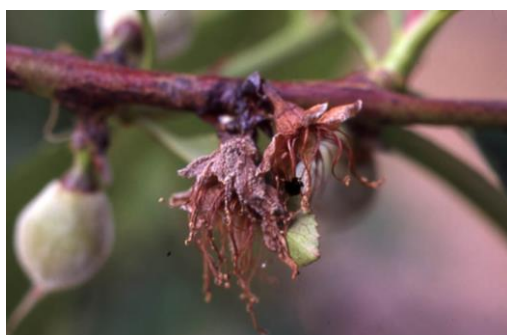
岡山県病害虫防除所による 4 月 21 日の県南部巡回調査では、**モモ灰星病（花腐れ）の発生ほ場率が 64.3%と平年（14.9%）より高くなっています。**また、**ナシ黒星病は昨年度多発しており、伝染源密度が高い**と考えられます。

広島地方気象台による向こう 1 か月の予報（4 月 21 日発表）によると、気温は高く、降水量は多いとされており、降雨が続くとモモ灰星病による果実腐敗及びナシ黒星病が増加する恐れがあります。ほ場をよく観察し、防除を徹底してください。

<防除上の参考事項>

モモ灰星病

- (1) 本病原菌は枝病斑内や樹上に残ったミイラ果で越冬し、4 月上中旬頃から分生子を形成し、風雨により飛散して花器感染する。昨年の発生が多かったため伝染源密度が高まり、また、4 月の降水量が多かったため、花腐れが多くなったと考えられる。
- (2) 本病は、オウトウ、スモモ等の他の核果類にも発生し、伝染源になる。
- (3) 花腐れ、枝病斑、縮葉病の病葉（灰星病菌が増殖しやすい）及び発病果の早期発見、早期除去を徹底する（図 1）。
- (4) 果実腐敗防除のため、幼果期～袋掛け前に 2～3 回、薬剤防除を行う。
- (5) トップジンM水和剤やベンレート水和剤の効果が低下している園は、耐性菌が発生している可能性がある所以他剤（アフェットフロアブル、オンリーワンフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルーツセイバー等）を使用する。



花腐れ



芽枯れ症状



果実腐敗（幼果）



果実腐敗（成熟果）

図 1 モモ灰星病の病徴

ナシ黒星病

- (1) 本病原菌は病落葉や芽の鱗片内で越冬し、4月上～5月上旬の降雨時に子のう胞子を開花直前から分生子を飛散する。昨年の発生が多かったため伝染源密度が高まり、また、4月上中旬の気温が高く、降水量が多かったため、発生しやすい条件となっている。
- (2) ほ場内の落葉は集めて焼却するか土中に埋却処分する。また、4～5月にかけて芽基部病斑のある芽や枝を切り取り除去する。
- (3) 4～7月の間、10～14日間隔で薬剤防除を行う。
- (4) 本病に対して防除効果が高いEBI 剤（インダーフロアブル、スコア顆粒水和剤等）は、耐性菌の発達を防止するために合計年2回までの使用にとどめ、他系統の剤（アフェットフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルーツセイバー等）と輪番（ローテーション）使用する。
- (5) ストロビードライフロアブル、アミスター10フロアブルを使用する場合は、薬害の恐れがあるため、落花30日後以降に散布する。



葉柄基部の病斑



葉の症状



幼果の症状



成熟果の症状

図2 ナシ黒星病の病徴

農薬の使用にあたっては、収穫前日数を考慮して農薬使用基準を遵守し、安全・適正に使用するとともに周辺農作物等への農薬飛散防止対策をとりましょう。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。